健苗移植と水管理の徹底で活着の促進を！

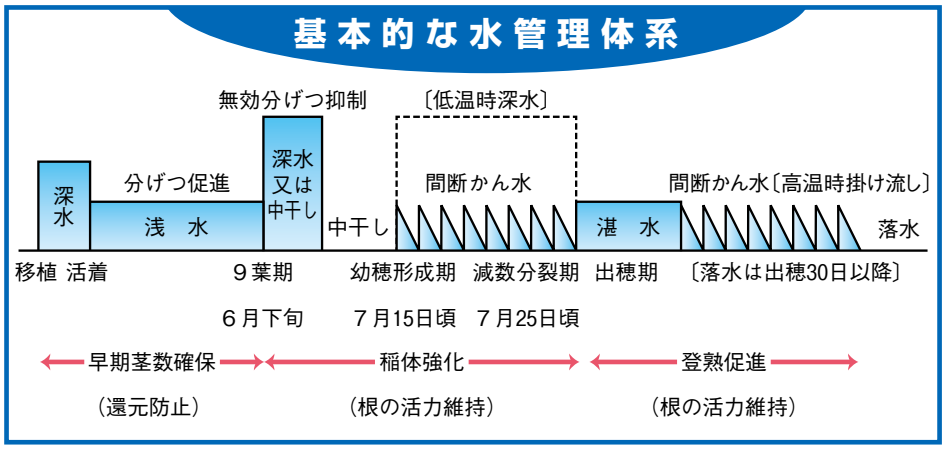
1　田植え作業とその後の管理

①田植えから活着まで

・田植え作業は、日平均気温14℃以上（中苗）、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。最高気温15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。平均14℃以上となるのは、平年であれば５月17日以降（アメダス能代平年値より）です。

・植え付け本数は４本／株程度とし、３cm以上の深植えにならないようにします。

・田植え直後は活着を促進させるため、水深４cm程度の湛水状態として保温に努めましょう（苗の活着には４～５日かかりますが、気温・水温が高いほど早くなります）。



②分げつを促進させる水管理

・高品質・良食味米の生産技術として強勢分げつの確保が重要です。分げつは、日平均水温23～25℃、日気温較差が大きい場合に発生が促進されます。

・「早朝かん水・日中止水」を基本に、気温が15℃以上の場合は浅水管理、15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。

③雑草防除

・発生草種および雑草の量に応じた薬剤の選択と適切な使用により、効果的な雑草防除を行いましょう。

・除草効果を高めるため、一発処理除草剤は「代かき日から10日以内」に使用します。代かき～移植までに10日以上かかる場合は、移植後の初期除草剤と一発処理剤の体系処理を検討してください。

・除草剤散布時の水深は、粒剤では３～５cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等では５～７cmとし、薬剤が拡散しやすいようにします。

・除草剤散布後７日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりと入水します。

・水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前の初期剤の使用は極力避けてください。やむを得ず移植前に使用する場合、使用時期は移植７日前までとなります。

2　いもち病防除

本田の葉いもちを防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。以下の点に注意して葉いもちの発生を予防してください。

①薬剤による葉いもち防除

・本田葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施します。（育苗期いもち防除剤として使用したベンレート水和剤やビームゾルは、本田まで防除効果は持続しません）

②耕種的防除

・育苗中に葉いもちが確認されたハウスの苗は移植しません。

・ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になるため、補植終了後は水田の泥の中に埋めるなどして、完全に処分してください。

・乾燥状態で越冬した稲わら・籾殻は、葉いもちの伝染源となるので、ほ場周辺に放置しないでください。なお、敷きわらを使用した野菜ほ場の周辺では、葉いもちの早期発生に注意してください。

来月のあなたの運勢（2019年6月）

牡羊座（3・21～4・19）　コミュニケーション運が活性化。初対面でもフランクに話し掛けるとラッキーな結果に。習い事を始めるのも◎